

生涯にわたって 社会のいたるところで学ぶための方法序説

自治体DXワーキンググループの データから見たこと

佐藤 克宏

提案：「教える」と「教わる」の境界線を、デジタルで少し溶かしてみませんか？

こんにちは。宮城県南部に位置する角田市から、生涯学習課の佐藤克宏です。角田市は豊かな自然と温かい人情が息づくまちですが、全国の多くの自治体と同じように、ここ数年で私たちの働き方や学びの環境は変化しています。

現在、学校現場でも子どもたちの学びの景色がガラリと変わりましたし、私たち社会教育の現場にも「デジタル化」の波が押し寄せて久しいです。オンライン予約システムの導入や、講座のオンライン配信など、「便利になるのは頭では分かるけれど、次から次へと新しいツールが出てきて追いつくのが大変」という現場の戸惑いは、決して珍しいものではないと思います。窓口でスマホの操作を尋ねられる機会も増え、対応に追われる

日々を過ごしている方も多いのではないのでしょうか。

私は今年度、自治体の「DXワーキンググループ」でリーダーを務める機会がありました。どうすれば業務を効率化し、スマートな組織にできるか、その最適化を目指して全職員アンケートを実施しました。ところが、そこで返ってきた結果を眺めているうちに、不思議な感覚にとられました。

「このデータが示している課題は、単なる組織の業務改革の話にとどまらない。私たちが普段向き合っている『社会教育の現場』や『人づくり』の根幹に関わる問題ではないか」と。

データが映し出した「良かれ」の裏と、人的資本的な課題

調査で見えたのは、「今の職場に満足している人ほど、現状維持を求め、変化を望まない」という少し皮肉な結果でした。

私たちは、住民のため、組織のために良かれと思って、波風

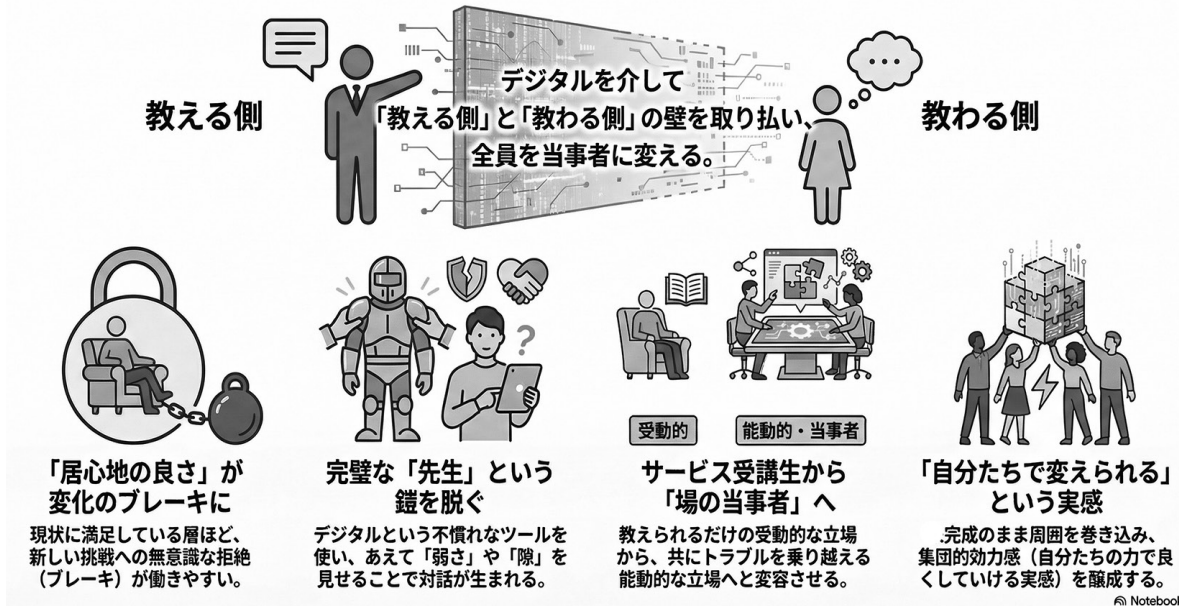
の立たない安定した環境を作ってきた。しかし、その「居心地の良さ」こそが、いつの間にか新しい挑戦への見えないブレーキになっていたのかもしれない。

また、「失敗を恐れずに業務にあたることができる（心理的安全性）」という安心感の醸成だけでは、人は自ら動き出さないと。特に実務の中核を担う層は、日々の膨大な業務に追われ、「自分で決めて動く（自律性）」ための時間と権限を持っていませんでした。

物理的・精神的な余裕がない、いわゆる「リソースの枯渇」状態の中で、上から「DXを進めろ」と「外的動機」による推進ばかりが与えられても、人は疲弊するばかりだと思います。自律的なハンドルを持たされないままアクセルを踏めと言われても、本質的な変革に至ることは難しいでしょう。

これはDXを推進していく上

デジタルが溶かす「教える」と「教わる」の境界線



で、組織の「人的資本」の観点から非常に大きな課題です。そして同時に、社会教育の現場で私たちが直面している、「先生が用意した完璧な講座を、ただ座って聞くだけ」という「受け身の学習者」を生み出してしまう構造と、酷似しているように感じました。

デジタルが「先生」と「生徒」を溶かした

この「自ら動けない」という組織と学びの硬直化を、どう解きほぐせばいいのか。そのヒントは、あるタブレットを使用した講座の風景にありました。

講座の最中、講師役の職員が予期せぬ画面のフリーズや操作の間取りに直面し、冷や汗をかいていた時のことです。教室に少し気まずい沈黙が流れたその瞬間、受講生の方が「あ、そこはこっこのボタンを押せばいいんじゃないかな？」と、自然な形で助け舟を出してくれたことがありました。

学校教育では、先生が「教えるプロ」として、隙のない完璧な授業を成立させなければならぬというプレッシャーがあるかもしれません。しかし、社会教育の場は、もっと自由で、人間臭くていいはずで、デジタルという、誰にとってもまだ不慣れで余白のあるツールが間に挟まることで、「教える側(完璧な存在)」と「教わる側(未熟な存在)」という固定化された境界線が、スッと溶けた瞬間でした。

「弱さ」の共有から生まれる集団の力

この出来事から、DXの本質の一つが見えてきました。それは、全員が高度なITスキルを身につけることではなく、「ここが分からないから教えてほしい」と素直に言える余白を作ることにあるのではないのでしょうか。

前に立つ人間が「完璧な先生」という鎧を脱ぎ捨てて「弱さ」を自己開示することで、受講生はただサービスを受け取るお客

さんから、「一緒にこの場を乗り切ろう」とする「一緒に場を作る当事者」へと変わります。

これは、組織づくりや人的資本の向上にもそのまま通じるのだと思います。一部の担当者が密室で完璧な計画を作り上げるのではなく、未完成のまま「ここから先は一緒に考えよう」と周りを巻き込んでいくこと。「集団的効力感」なども表現されるのだと思いますが、要するに「私たちのまちと組織は、私たちの力で良くしていける」という実感を取り戻すことです。自らの手でより良くできるといいう手触り感こそが、一番の変革の原動力になるはずです。

不完全なままでつながる、これからの社会教育

社会教育におけるDXは、単なる業務の効率化ツールではなく、人と人との「対話」を生み出すためのきっかけのはずです。分からないツールに出会ったら、まずはデジタルを使って「ち

よっと困ってみる」。そして、素直に助けを求めてみる。そこから生まれる「お互い様」の温かいコミュニケーションが、組織の硬直をほぐし、地域を温める新しい「発想する授業」の第一歩になるのではないのでしょうか。

完璧を目指さず、不完全なままでつながり合う。そんな柔らかな社会教育の未来を、角田市の現場から皆さんと一緒に模索していけたらと願っています。

次号の「発想する！授業」は中央区安西さんからお送りする予定です。お楽しみにしてください。

宮城県角田市教育委員会生涯学習課主査（社会教育主事）

佐藤克宏
連絡先…

syougaku@city.kakuda.lg.jp

Workshop Collection



サステナブルタウン
SUSTAINABLE TOWN

ワークショップのプロが選ぶ、その理由。

